

新世紀のキャンパス

Campus of New Century

獨協大学

天野貞祐記念館／東棟／学生センター

天野貞祐記念館は、地上5階建て、東西約165m、約2万9500㎡と学内最大の建物だ。



ツインタワーをガラス張りのブリッジでつないだ東棟外観。



地上6階建ての学生センター。各部屋をスケルトンにし、課外活動の“見える化”を意識。



太陽光パネルを天野貞祐記念館、東棟、学生センターの全てに採用した。



雄飛ホールには舞台を内蔵。10m高の可動ガラス扉を開放すると、オープンエリアになる。

獨協大学は、2014年の創立50周年に向け、この数年間で「大学改革」と「キャンパス再編」を集中的に推進してきた。

大学改革の面では、国際教養学部(2007年)、法学部に総合政策学科(2008年)、外国語学部交流文化学科(2009年)と、新学部・学科を相次ぎ設置。「語学の獨協」を強固なものにすべく、「専門分野+英語」を身につける「全カリ英語」も確立した。

キャンパス再編の面では、まず一次再編計画として、2007年に「天野貞祐記念館」と「人工芝グラウンド」を整備。二次再編計画では2010年に学生

寮を中心とした「敬和会館」、新教室棟である「東棟」を竣工、三次再編計画では2012年に「学生センター」を竣工し、このあと新教室棟「西棟」(仮称)建設を予定している。

「天野貞祐記念館」は、「大学は学問を通じての人間形成の場である」という建学の理念を具現化した建物で、「知の拠点」と位置づけられている。キャンパス再編のランドマークの中核を担うのは、新図書館と異文化交流スペース「ICZ(インターナショナル・コミュニケーション・ゾーン)」だ。1~3Fの図書館は、広い開架スペースと、用途に応じて使い分け

のできる多彩な閲覧室が特徴。4Fには100万冊収蔵可能な自動書庫も備えている。3・4FのICZは、各言語別に分かれた「言語コミュニケーションゾーン」と複数の言語が飛び交う「多言語文化コミュニケーションゾーン」からなる。

「東棟」は、全学部が使用する



ミニ水田では、昨年12kgの米を収穫。食料と農業と環境のつながりを学ぶ。

里山を再現した屋上庭園は、130種類以上の草木や野菜を栽培する体験学習の場。

る共通の教室棟で、大教室(4室)、特殊教室(4室)、PC教室(16室)などを含めた65教室が配置されている。

「学生センター」は、全学生が自由に使用できる複合施設で、部室棟も兼ねている。大学祭などのイベント時に使用する「雄飛ホール」をはじめ、4つのホール、学生ラウンジ、武道場、スタジオ、トレーニングルームなどを配置した。

キャンパス再編で欠かせないキーワードが「エコ」だ。天野貞祐記念館を作るときに「エコキャンパス・プロジェクト」をスタート。次世代型教育施設のモデルを目指した東棟には、屋上庭園、間伐材を使用したキャレルブースなどを採用した。学生センターの各部室には消費電力をチェックできるモニターを設置。芝生広場の「ミニ水田」では農業体験も実施している。

この環境教育が、同大学としては新分野になる2013年の経済学部国際環境経済学科の設置につながった。「理工系の環境学とは全く異なる切り口」と城田修司施設事業課長が語るように、新学科のコンセプトは、地球規模の環境問題に対し、経済学を軸として、英語力を強みに解決する力を育てるというものだ。新キャンパスを舞台に、より英語に重点を置いた全カリ英語と体験学習等で学生を育てる。

(本誌 能地泰代)



学生センターの1Fにある学生ラウンジには「SUBWAY」が出店。野菜たっぷりのサンドイッチは、学生や外国人の教員にも好評だ。



(上) 図書館には「静粛ゾーン」、PCを利用しながら学習・研究できる「機器利用ゾーン」、「グループ利用席」、「共同学習室」などの閲覧室や、「AVコーナー」「発話トレーニングブース」などを備えた。(右) 個人でもグループでも、心地よい距離感を保てるミトコンドリア形の机は職員のコ案。



ICZは異文化交流の場。大画面による海外のテレビ放送、気軽に外国語でおしゃべりできるチャットルームもある。



東棟にコミュニケーションスペースとして設けられたキャレルブース。造作に使用した埼玉県産の間伐材は独特の暖かみを持つ。



自然採光と自然換気を階段と融合させた東棟エントランスロビー。「学生が楽しく過ごすところだから」と、明るい内装にこだわった。